

エペソ人への手紙5章32-33節 「キリストの花嫁」

1A 結婚にある奥義

- 1B 神のかたちに造られた人
- 2B 耕し、名をつける人
- 3B 「ひとりでいるのは良くない」
- 4B 一体となる男女

2A キリストのからだ

- 1B からだの不思議
- 2B 一つとなられたキリスト
- 3B キリストに結ばれた私たち

3A 花婿を待ち望む花嫁

- 1B 婚約した女
- 2B 花嫁修業
- 3B 天のエルサレム

本文

エペソ人への手紙 5 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 5 章前半まで来ました。教派、午後礼拝で 5 章 21 節から 6 章 9 節までを、一節ずつ見ていきます。今朝は 5 章 31-32 節に注目します。「³¹それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」³² この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。」

1A 結婚にある奥義

私たちが今日、学ぶ、5 章 21 節から 6 章 9 節までは、夫婦関係、親子関係、そして労使あるいは職場の関係に対する、使徒パウロの勧めになります。非常に身近なこと、毎日、24 時間接している関係に対して、パウロは教えていきます。夫婦関係を見ても、親子関係、そして労使関係であっても、一つ一つが、セミナーとして聖書からお話ししなければいけないほどの、話題一杯の内容です。けれども、今日は、エペソ人へ手紙の中での全体の中で、パウロがここで語っていることに注目したいと思います。エペソ書は、神がいかにキリストにあって私たちに豊かに祝福してくださっているかを語っています。そして、教会がキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのもので満たす方が、満ちておられるところです。

私たちに与えられている関係は、すべて神から来ていて、神ご自身の栄光を反映しているということを知ってください。それらの関係の中にいることは、すなわち、神ご自身に関わることであり、その中でも教会においては、父なる神の愛するキリストの栄光がそのまま現れているところです。

こんなちっぽけな自分が、どのようにしてキリストの栄光を現すのか？と思うかもしれませんが、いえ、恵みによってすでにキリストの栄光を現しています！これから説明していきますが、それは完璧を意味しているわけではありません。足りないところがあっても、いや、足りないところがあるからこそ、神に従順になることにより、神に拠り頼んで、そこに現れる御霊の働きこそが、神の意図しておられることです。

そうした、あらゆる自分の周囲の関係の中で、神が筆頭に造られたのが結婚でした。今読んだ箇所は、みなさんもよくご存じの創世記 2 章の最後に出てくる言葉です。アダムを神が造り、それからアダムからエバを神は造られ、それで一つになったのですが、その話から「**それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。**」と主は語られ、そしてパウロは、実はそこには奥義があり、キリストと教会を表しているということです。ふたりが一体となるように、教会はキリストのからだとなっています。教会がキリストの従うように、妻が主にあって夫に従います。キリストが、ご自分を教会のために献げられたように、夫は自分のからだのように妻を愛します。その夫婦関係の中に、麗しいキリストと教会の愛の関係が含まれているのだ、というのです。

1B 神のかたちに造られた人

ところで、私たちは、神をどのようにしたら知ることができるのか？と思うかもしれません。神は目に見えない存在で、宇宙よりも大きい存在で、知りようもないではないか？と思うでしょう。けれども、自然を見たら、いかがでしょうか？それら被造物に神の永遠と、創造の力が明らかに現れています。どんなデザイナーも、花のように着飾ることはできません。生き物の体が、どれほど精巧に造られているかは、エンジニアがどんなにAI技術を駆使して、犬のようなロボットを造っても、本物には到底、かないません。戦争の中で、爆発物を発見するのに活躍している小犬がいて、その嗅覚のすごさには驚きます。

そして何よりも、人そのものに、神を知ることができるようになっていきます。聖書の初め、天地創造の話は、あらゆる被造物の中で神は人を、ご自分のかたちに造られたと記しています。「創1:26-27 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。」目に見えない神が、人によって、かたちとして現れているのです。今でこそ、人の世界は、その犯した罪によって、神のかたちから損なわれてしまっているのですが、しかし、それでも、神のかたちとしての姿は数多く現れています。

東日本大震災の直後、私はメールで質問を受けました。被災している人々にとって、神はどこにいるのか？と。私は応えました。ちょうど、救援旅行のために準備をしていた時です。「キリスト者がそこに神によって遣わされて、共にいることによって、神がいることが分かる。」と。救援活動をし

ている時に、私が東北出身なので、津波で破壊された家やお店に最初に挨拶する役割になりました。少し東北弁を使って。そして救援の物資を渡し、最後に、カルバリー西東京の山東さんがお祈りをします。みなが涙を流し、感謝してくれました。挨拶をし、お祈りすること、そこに、神とキリストがどのような方を知ることができるのです。この肉体も含めて、神は人をご自分のかたちとして造られているのです。

2B 耕し、名をつける人

そして、神のかたちに造られた人は、神によって、エデンの園に置かれます。そして、そこを耕し、守るようにされます。そして、神の造られた動物が連れて来られます。それぞれの名をつけるためです。ここに、働くこと、また、管理することの始まりがありますね。多くの人々は、仕事というと、とても嫌なイメージがあります。仕事には、苦労や不条理がしばしばともなうからです。けれども、仕事が、アダムが罪を犯す前からあったことに気づいてください。罪を犯してから、それが汗水流して苦労しても、茨しか生えないみたいな、否定的な要素が出てきたのです。仕事ができるということは、神のかたちに造られた者としての存在を確認できるのです。

3B 「ひとりでいるのは良くない」

その時に、主が人について、「ひとりでいるのは良くない」と言われたのです。家畜や空の鳥、野の獣に名を付けている時に助け手がおらず、それで神は、「人がひとりでいるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を送ろう。(創 2:18)」と言われたのです。なぜ、神は、ひとりでいるのは良くないと言われたのでしょうか？

それは、神のかたちそのものが、孤独ではないからです。創世記 1 章 26 節に、「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。」と言われていました。わたしのかたちに、と言わず、われわれのかたちにと言われました。ヘブル語での複数形は、必ずしも複数を示すだけでなく強調するためだという説明がありますが、それでも、ひとりの神であっても、この方は孤高ではなく、その中に交わりがあるのだということです。神はおひとりで、しかし、その中に関係を持っているのです。新約聖書に入りますと、それが父、子、聖霊であることが分かります。三位一体の神です。

エペソ 5 章の本文では、妻が、主にあつて夫に従いなさいという命令があります。それを読むと、男尊女卑であるとか、主従関係であるとか、そういった見方があります。これは、間違いですね。これもまた、罪が入って来てしまった、神の元々の意図から結婚や男女関係が離れてしまったからにすぎません。罪が入って来てしまった後の、夫婦の状態を主はこう言われています、「3:16 あなたは夫を恋慕うが、彼はあなたを支配することになる。」この、「恋慕う」というのは「欲する、自分のものにする」というようなヘブル語です。自分のものにしたいのに、夫が支配するということです。これこそ、男女間での競争、だれが主導権を握るのかというような競争ですし、また男の女支配のような姿です。けれども、これが本来の姿ではないのです。本来は、「助け手」です。日本

語にいい言葉ありますね、「伴侶」であります。主にあって働いている男のそばにいて、助けてくれる人が妻だということです。そこには上下関係はありません。全く対等であり、共にいて、それぞれの務めを果たしています。

4B 一体となる男女

そして、アダムはエバを見て、「これこそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。男から取られたのだから。(2:23)」と言います。彼は、エバがいることによって、初めて自分が自分になれるというような、感動を覚えます。そして、次の節、24 節があるのです。「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」

ここの「一体」ですが、このヘブル語「**עִהְדִּתִּי**」は、神がご自分を、「わたしは唯一の神」と言われる時の「唯一」と同じ言葉なのです！申命記 6 章 4 節、「聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。」神が唯一、ひとりという時に、交わりにある一体の言葉を使われているのです。ふたりが一体になるというのは、実は神ご自身のかたちそのものを映し出しています。

結婚した男女が、一体となって生きている時に、そこには、神の栄光が如実に現れているのです。イエス様が、捕らえられる直前に父なる神に祈られた祈りがあります。そこで、キリストを信じる者たち、教会について祈られた祈りです。「ヨハ 17:22 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。」父と子が一つであられるように、この方において一つになるようにと祈られているのです。一つになることが、神の御目的であり、エペソの手紙も、キリストにあってすべてのものが一つに集められるのが、神の国の姿であり、そこに神の栄光が現れます。

そして、交わりにおいて一体となっていることができるのは、どうやってでしょうか？イエス様は、ユダヤ人に、ご自分が父と一つであることを示めされてから、こう言われました。「ヨハ 5:20 子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様にを行うのです。」主は、いつも父のみこころに従っておられました。そして父も、子を愛されて、すべてのことを示しておられました。子は父に従い、父も子を愛する愛のゆえに、ご自身を子にすべてを明かしておられたのです。こうした互いに、自分を相手に従わせることによって、そこに完全な一致があるのです。これが、交わりにおける一致です。

パウロは、5 章 21 節で、「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」と勧めています。そして、夫婦のことを語り、次に親子のこと、そして主人と奴隷のことを語っています。なぜ、従うことをそこまで教えているのか？それは、神のかたちのゆえです。神ご自身の中に、交わりにおいて一つになっており、神のかたちに造られている私たちも、一つになっているために互いに従うのです。

2A キリストのからだ

パウロは、この結婚についてのみことばを、キリストと教会の奥義だと言っていますが、それは、30 節にあるように、「私たちはキリストのからだの部分だからです。」教会が、キリストのからだと呼ばれるほど、キリストと一体になっているということです。

1B からだの不思議

からだというのは、本当に不思議な存在です。神秘に満ちています。「詩 139:13-14 あなたこそ私の内臓を造り母の胎の中で私を組み立てられた方です。14 私は感謝します。あなたは私に奇しいことをなさせて恐ろしいほどです。私のたましいはそれをよく知っています。」どんなに医学が発達しても、人体のメカニズム、機能を全て思い計ることはできません。母胎から、いのちが現れます。同じように、キリストのからだにも、神は、新たないのちを生み出してくださいます。

そして、体の不思議は、互いに互いがつながっていることです。どんなに西洋医学が、体の部位を解析しても、その器官は他の器官の影響を受けます。どこかが少しでもいつもと違う動きをすれば、他の器官が必死にバランスを保つために全力で動き始めます。そのバランスからも離れて、独立独歩で生きようとするのが、癌細胞です。体の一部が独りで生きようすると、体全体が死ぬんですね。早いうちに切除するしかありません。同じように、キリストのからだで、自分だけで生きていると思っている者が出て来れば、その人は取り除かれなければいけません。それだけ、私たちはキリストにあって互いにつながっています。

それから、体に自然の治癒力は、とてつもないものです。自分または他人の、身体のどこかの部分を取って、違うところに移植すれば、そこから再び再生が始まります。私も最近、親知らずの移植手術を受けました。抜歯をしなければいけないほど、奥歯の一つが悪くなったのですが、入れ歯やインプラントではなく、親知らずを抜いて、その部分に入れたのです。歯茎に少しずつ根付きます。歯の根のところにある膜に、再生機能があるからです。移植したところで再び骨を造ることができるのです。これが、キリストのからだ、または神の家族と言ってもいいでしょう、しばしば起こることです。これだけ、仲が悪かった人たちが、ある時に周囲を驚かすほどに和解します。理屈を越えていますね、キリストのからだには自己治癒作用があります。

2B 一つとなられたキリスト

このようにして、私たちはキリストのからだとして一つになっているのですが、かしらなるキリストに私たちがつながっているからこそ、からだの機能です。キリストが私たちと一つになってくださいました。それが、ここ本文の内容です。夫が妻と結ばれて一体となるように、キリストが私たちと一つになってくださいました。

何よりも、神が人として来られたこと、受肉があります。キリストは神であられたのに、その身分

に固執なせずに、人の姿を取られました。ベツレヘムの家畜小屋で生まれ、ナザレの村で貧しい家庭の中で育ちました。

そして、イエス様は、バプテスマを受けられます。これは驚くべきことです、バプテスマのヨハネは戸惑いました。ヨハネは、自分こそがバプテスマを受けなければいけないのに、と言いましたが、今、これをするのは正しいことなのだとイエス様は言われました。ヨハネは、悔い改めのバプテスマを受けていました。イエス様は悔い改める必要はなかったのです。けれども受けられたのは、私たち悔い改めなければいけない者たちと一つになるためです。そしてイエス様は、聖霊に満たされました。私たちは肉なる者なのに、聖霊に頼らなければいけません、イエス様は神の御子です。それでも、聖霊に満たされて、数々のみわざを行われました。

そして、イエス様は、罪人に数えられました。人になられただけでなく、人として最も卑しいかたちで、罪人として卑しめられ、苦しみを受けられたのです。これらは、私たちの罪を身代わりに受け、罪の苦しみを受けてくださったからです。

3B キリストに結ばれた私たち

このようにして、キリストは私たちと一つになってくださいましたが、今度は、私たちがこの方に結ばれている者として、神と一つになっています。キリストが神の子として生きておられるように、私たちがこの方についていきます。私たちは神になるのではないのですが、神の子どもとして、この方に似た者になります。人でありつづけますが、神のかたちが回復していきます。

イエス様は、聖霊によってみごもったマリアから生まれました。同じように、私たちは御霊によって、新しく生まれました。イエス様がバプテスマを受けられ、聖霊に満たされましたが、私たちも、イエスの死と復活にあやかるバプテスマを受けました。そして聖霊の満たしも受けることができます。そして、イエス様は、墓の中からよみがえり、天に昇られました。私たちは、イエス様が天から降りて来られる時に、一瞬のうちに引き上げられて、天に入ります。そして、栄光の姿に変えられます。キリストのようになるのです。イエス様が天から地上に来られますが、私たちも、栄光に変えられた姿で共にイエス様と来ます。そして神の国が建てられますが、私たちもキリストと共に御国を統べ治めるのです。キリストの内にいるというのは、キリストがなされることを私たちもその中にあるのだ、ということなのです。キリストはキリストであり、神の御子なのであり、私たちは人にしかすぎないのですが、交わりにおいて、キリストにあるものを私たちもあずかれるのです。

3A 花婿を待ち望む花嫁

1B 婚約した女

パウロが、教会をキリストの花嫁として、ここエペソ 5 章で描いているのに気づいてください。
「5:26-27 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるも

のとすためであり、ご自分で、しみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」これはまさに、花婿を迎えるために、花嫁が身を整えている姿であります。結婚式の時の、新婦の姿は実に美しく、そして恵みに満ちています。キリスト教式の結婚式は、教会の携挙を表していることはご存じでしたか？初めに、新郎が入場しますね。それから、新婦が入りますが、それが中心です。そして新郎がお迎えします。これは天に戻られたイエス様のところに、花嫁である教会が引き上げられて、天において子羊の婚姻をする姿を表しています。

2B 花嫁修業

今、私たちは、いわば花嫁修業をしています。当時のユダヤ人の結婚は、いいなずけ、すなわち両親が取り決めます。そして、適齢期になったら婚約をします。その婚約はほとんど結婚と同じぐらいの拘束力を持ち、そこで別れることは、離婚するぐらいの大きなことでした。マリアが、身ごもった話をヨセフが聞いた時に、内密に去らせようとしたが、それは公になったら、彼女は石打ちで死刑にされてしまうからです。姦淫の罪にみなされます。

そして、結婚式を迎えるのですが、マタイ 24 章にある、十人の娘の喩えによく表れています。花嫁が全てを整えて、付き添いの娘たちと共に待っています。花婿が父の家から出ます。行列を組み、また角笛などを人々が鳴らして出ていきます。そして、夜中に引き取りに来るのです。花嫁は、花婿が用意したものに乗り、それで彼の家、正確には彼の父の家に行き、そこで婚礼があるのです。これが、まさに教会の携挙の姿です。イエス様が戻って来て、私たちを引き取り、そして父のいるところ、天において住まいを用意しておられる処に行き、そこで子羊の婚礼にあずかるのです。

私たちは、この方にお会いするために、みことばと、水の洗いによって聖なるものとされ、整えられています。教会生活というのは、はっきりいえば、イエス様の前に、傷のない、しみのない、恵みの栄光の姿で連れていかれるためです。日々、みことばにふれて、御霊によって導かれていく時に、私たちは、間もなく来られるイエス様にお会いする準備をしているのです。

4B 天のエルサレム

そして、主が戻って来られて、地上に神の国が建てられ、千年間、この方と統治します。それから、天地が過ぎ去り、新しい天と新しい地が造られます。そこに、天からエルサレムが降りてくるのです。神ご自身の都が降りてきます。ヨハネは、御使いにその都を次のように紹介されています。「黙示 21:9 ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう。」そして、すべてが宝石によってできている都を見せられるのです。そこには、太陽の光がありませんでした。なぜなら、神と子羊ご自身が光なって都を照らしているからです。そして、水が流れています。都の中央から、神とキリストの御座から流れる生ける水が、人々を生きし、いやします。これが、人の究極の姿です。神とキリストに、一つになり、結ばれている姿です。この方のうちにいる姿です。

そして、これが、夫と妻の結びつきに現れているのです、キリストと教会というものは、かくも聖なるものであり、畏れ多きものであり、また恵みと栄光に満ちたものです。聖書の最後が何で終わっているかご存じですか？「22:17 御霊と花嫁が言う。『来てください。』」「22:20 これらのことを証しする方が言われる。『しかり、わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ。来てください。」みなさんに、イエス様に会いたい飢え渴きはありますか？世の楽しみの方に引き寄せられていますか？それとも、世の楽しみは過ぎ去り、この方の用意されているものだけなのだと思って、切実に待ち望んでいますか？主よ、来てください。マラナ・タ。主を愛する初めの愛に戻り、また留まりましょう。